

[追悼]

秋山雅彦会員・三枝春生会員の想いで

仲谷英夫*

化石研究会のみならず、日本の古生物界に大きな功績を残された、三枝春生会員が2022年1月12日に、秋山雅彦会員が同年11月2日に永眠されました。お二人は私にとって特に想いで深い方々でしたのでその喪失感は計り知れないものでありました。

お二人の詳細な追悼文は秋山会員については保柳康一さんが「日本地質学会 News」vol. 26, no. 1: 20 (2023年1月)に、三枝会員については池田忠広さんが「化石」no. 113: 27~29 (2023年3月)に書かれていますので、ここではお二人の化石研究会との関係と私の個人的な想いを中心に書かせていただきます。

秋山先生（と呼ばせていただきます）のお名前は高校生の時に読んで井尻正二著「化石」（岩波新書1968年刊）に、東京教育大学大森昌衛研究室で古生化学の先端的研究をおこなっている研究者として紹介されていました。その後、北海道大学へ1973年に入学して、教養部で地学を履修したときに秋山先生が担当されており驚きました。

また、井尻著の「化石」で紹介されていた貝の飼育実験から貝殻形成の研究をおこなっている魚住 悟先生（その後、卒業論文や博士論文で大変お世話になった）もいらっしゃいました。当時、化石研究会が提唱している新しい古生物学が勉強できるのだと感動したことを覚えています。

秋山先生は1959年に化石研究会が創設されたときからの会員で、1977年と1983年~1986年には会長を務められ、つねに古生化学と有機地球化学の研究をリードされてきました。また、化石研究会の成立からその発展の歴史について「A historical view of the Fossil Club to the Fossil Research Society of Japan（化石研究会会誌38巻第2号, 135-140, 2005年12月；日本語版：<http://kasekiken.jp/etc/history.pdf>）にまとめられ、2009年6月の化石研究会創設50周年記念講演会では「化石研究会創設の頃を振り返って」と題して講演をされています。

その後、理学部地質学鉱物学科に移行して「地殻化

学」で秋山先生の講義を受けました。「地殻化学」という授業は当時の地質系学科では特異なもので、「地球化学」が現在科学であるのに対して、「地殻化学」は歴史的なアプローチであるとのことでした。前半は舟橋三男先生の地球の起源、造山運動、変成作用、鉱床作用など無機的な地殻化学で、後半が秋山先生の講義で以下のような内容でした。

1. 炭素の地球化学的サイクル
2. 堆積物中の埋没有機物
3. 地球の生成と原始大気
4. 海洋の成立
5. 生命の起源
6. 化学化石と Organic Geochemistry
7. 石油とその成因

このように、新しい古生物学を進めている地質教室ではありませんでしたが、私自身は樺太産の恐竜やデスモスチルスを所蔵している教室と思って入ったこともあり、脊椎動物化石の研究がしたいと思っていました。卒業論文では魚住先生の研究室で北海道西南部の長万町周辺の新第三紀層序と貝化石について研究していましたが、個人的にもよくお話しをしていた秋山先生に相談したところ、自分の希望は率直に話した方がいいというアドバイスをいただき、魚住先生や京都大学の亀井節夫先生のご配慮で、現在のように古脊椎動物学の研究ができることとなりました。その後も、札幌や松本に伺うときには研究室やご自宅にも伺わせていただき、いろいろなお話しができたことを感謝しております。

三枝君（と呼ばせていただきます）とは1982年に京都大学の亀井先生の研究室に入学されて以来の仲間でした。当時は、久家直之さんや平山 廉さんを中心に分岐分類学の勉強を進めていましたが、三枝君は同期の渡部真人さんと一緒にタフノミーの勉強のために医学部の図書館に通って法医学の論文を集めて紹介していたことをよく覚えています。

その後、私が香川大学教育学部に就職して、科研費

*連絡先住所、東京都江東区扇橋 3-17-10

E-mail: hipparionaffricanum@yahoo.co.jp

の国際学術研究で中国の調査を始めたときには、片腕（両腕かもしれませんが）となって発掘調査や標本調査に活躍していただきました。中国の甘肅省から雲南省へ、またタイの発掘調査に関しては三枝君の予備調査がなければ、進めることができませんでした。この間に、中国（北京の古脊椎動物古人類研究所など）やタイのみならず欧米の博物館（特に、ロンドンの自然史博物館とニューヨークのアメリカ自然史博物館）での標本調査については三枝君と一緒に滞在したことがいい思い出となっております。

この科研費の報告書（「後期新生代の哺乳類動物群と古環境の変遷史」研究報告）「Northern Hemisphere Geo-Bio Traverse」（この名前は渡部さんに考えていただきました）no.1～4で三枝君が最初に報告された以下の研究はその後いろいろな論文にまとめられました。

中国甘肅省霊台県雷家河層の長鼻類化石（No. 1: 22～27, 1993）

後期新生代長鼻類の臼歯使用痕に関する初歩的研究（No. 2: 34～43, 1994）

哺乳類動物群による元謀原人産出層の年代決定について（No. 4: 4～13, 1997）

なお、これらの報告書は国立国会図書館に所蔵されています。

また、脊椎動物の系統復元については京都大学での勉強をさらに進められ、長鼻類や恐竜の研究に生かされていますが、化石研究会会員を中心にまとめられた「化石と生物進化」（新版地学教育講座6、東海大学出版会1995）の「系統復元の方法」の章でわかりやすく解説されています。この本では秋山先生も「分子化石と古生化学」、「生命の起源」、「生物の初期進化」を執筆されています。



2009年6月13日（土）化石研究会50年記念大会（鶴見大学記念館）で記念講演をされる 故 秋山雅彦会員。神谷英利会員提供。

化石研究会では、三枝会員は1987年1月の第5回総会・学術講演会をはじめとして15回の講演を行なわれています。2018年に鹿児島大学で開かれた第150回例会のシンポジウム「3次元データとその解析に関する最前線の研究」では、「恐竜および長鼻類骨格の3D復元」について最新の研究成果を発表されました。また、2019年11月2日・3日には第152回例会として、兵庫県三田市の県立人と自然の博物館を会場としたシンポジウム「パレオアートと博物館」、「丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム」の巡検の企画から運営までをしていただきました。

三枝君はさまざまな困難がある中でも徹底的に研究を進める方で、中国でゾウ化石の頭骨を観察する際に写真はおろか、メモも取ってはいけなかった中で、観察した事項を記憶して、その場を外したトイレの中で、スケッチや記載をされていました。タイの野外調査の際にもある重要な後期中新世長鼻類化石産地ですべての骨片まで採集する（この時はご本人が参加できず、私たちが行いましたが）ように指示されたこともあります。アフリカで調査地からゾウの化石を持ち帰るエピソードは池田さん（2023）の追悼文の中で触れられています。また、ニューヨークでは滞在が長くなると、かなり離れたドミトリイに移って地下鉄で通ったり、アディスアベバでも郊外のホテルから乗合バス（アメリカのゾウ研究者がテロに巻き込まれたような）で博物館に通ったりするなど、タフな面を持っている方でした。

これらの調査をはじめ、研究面だけでなくさまざまな経験をさせていただいたことに感謝しております。

あらためて、秋山会員、三枝会員からいただいたさまざまなご指導、ご貢献に対して心より感謝申し上げます。安らかに眠りください。



故 三枝春生会員（左）と筆者。2019年11月3日（日）、化石研例会巡検で見学した丹波竜の発掘地にて。小幡喜一会員提供。